



イスラームにおける地獄の表象

東京大学大学院 人文社会系研究科

教授 竹下 政孝

地獄の七つの門

前回、本誌（2006年12月/2007年1月号、pp. 42-46）に、イスラームにおける天国のイメージについて書いたので、今回は、地獄のイメージについて紹介したい。コーランには、地獄の様子が、様々な章で断片的に描写されているが、その時に使われる地獄の名称は一様ではない。コーランにあらわれた地獄の描写を預言者ムハンマドの言葉として伝わっている伝承と豊かな想像力で補って、詳細で、統一的な地獄像を作り出したのは中世の説教師たちである。かれらは「本当に地獄こそ、かれら全ての者（悪魔の誘惑に従って、邪道にそれるような人々）に約束される場所である。それには七つの門があり、各々の門には、かれら（罪人）の一団が割り当てられるのである」（コーラン15章43-44節）にあらわれる地獄の「七つの門」は、地獄の七つの領域を指していると解釈した。さらに、これら七つの領域は、階層構造をなしていると考えた。そして、コーランの異なった箇所に使われている地獄の名称を、これら地獄の七つの領域の名前にあてた。七つの階層をもつ地獄の構造は、説教師たちによってしばしば引用されるムハンマドの以下の言葉から明瞭に窺える。

ムハンマドが、天使ガブリエルに「地獄の（七つの）門は、我々の世界の門に似ているのでしょうか」と尋ねたとき、ガブリエルは次のように答えた。「それらの門は開いていて、一つの門

の下にもう一つの門があり、さらにその下にもう一つの門があるというように、階層構造をなしている。一つの門から、その下の門までの距離は、歩いて700年かかる。一つ下の門に行くごとに、熱は70倍増加する。最も下の門には、偽善者たち、食卓の人々の中で不信仰者となった者（モーゼたちを迫害した）ファラオの一党がいる。そしてその門の名は、ハーウィヤ。第二の門には、多神教徒がいる。その門の名はジャヒーム。第三の門には、サービア教（コーランの中で、ユダヤ教、キリスト教とならんで一神教と認められている宗教）を信じる人々がいる。その門の名はサカル。第四の門には、イブリース（悪魔）と、彼に従った人々、そしてゾロアスター教徒がいる。その門の名はラザー。第五の門には、ユダヤ教徒がいる。その門の名はフタマ。第六の門にはキリスト教徒がいる。その門の名は、サイール。ここまで言って、ガブリエルは突然口を閉ざした。そこで、ムハンマドは、「ガブリエルよ。なぜ、第七の門に住んでいる人々のことを教えてくれないのですか」と尋ねた。ガブリエルは、「あなたは、どうしてもそれを知りたいのですか」と言うと、ムハンマドが、「はい」と答えたので、ガブリエルは次のように言った。「第七の門には、あなたの共同体の中で、大罪を犯したのに悔悟しないまま死んだ人々がいます」。これを聞いてムハンマドは気を失った。

この伝承では、第七の門の名前が述べられていないが、地獄の最上層であり、大罪を犯したムスリムに割り当てられている第七の門の名前はジャハンナムである。地獄の最下層にいるとされる「食卓の人々の中で不信仰者となった者」に関しては、少し説明が必要だろう。これは、イスラームでは預言者と考えられているイエスの奇跡に関連している。イエスの弟子たちが、イエスに向かって天から食卓が下るように求めたところ、豪華な食事がのった食卓が40日間、毎日天から下り、1,300人もの人々がこの食事をとったという。この奇跡のことが言及されているコーランの第五章は「食卓章」と名付けられている。食卓を下す前に、神は「本当にわれは、それ（食卓）をあなたがたに下すであろう。それで今後もしあなたがたの中で不信仰者となる者があれば、われは世の誰にもまだ加えなかった懲罰で彼を罰するであろう」（コーラン第5章115節）と警告している。この節に基づいて、食卓の奇跡を目撃しながら、不信仰に陥った人々は地獄の最下層に置かれたのであろう。

地獄の七つの名前

それでは、これらの地獄の七つの名前の意味について簡単に説明しよう。これらはすべてコーランの中で地獄の意味で使われている。ハーウィヤ、フタマ、ラザーは、それぞれコーランの中に一回だけあらわれる。また、この三語のあらわれるのは、すべて最初期の啓示に属する章である。ハーウィヤは、コーラン101章にあらわれる。この章では、最後の審判の日の様子が描かれている。その日、人々の生前の善行が秤にかけられる。善行の重いものは、天国に行く。「だが、秤の軽いものは、ハーウィヤを母とする。それ（ハーウィヤ）が何であるかを、何が汝に知らせるか。それは、焦熱の火である」（101章8 - 11節）。ここにあらわれる「それが何であるかを、何が汝に知らせるか」という表現

は、初期の啓示に特有のもので、当時のアラビア人が知らなかった特殊な用語が出てきたときに、その意味が説明される前に使われる表現である。それゆえ、ハーウィヤは、その当時のアラブ人には地獄の意味では知られていなかったのであろう。一般にこの語は、「底の知れない深い淵」を意味し、日本ムスリム協会訳の『注解聖クルアーン』では、「奈落」と訳されている。

フタマは、104章にあらわれる。そこでは、「かれら（悪口を叩き、中傷する者）は、フタマに投げ込まれるのだ」（104章4節）とあり、続いて「フタマが何であるかを、何が汝に知らせるか。焼きつけられた神の火、心臓を焼き尽くし、彼らの頭上に完全に覆い被さり、はてしなく続く柱の列となる」とフタマの意味が説明される。フタマの語根は、「粉碎する」という意味で、藤本・池田・伴訳の『コーラン』（中公クラシックス）では、「粉碎釜」と訳してあり、「どんなものでもこなごなにつぶしてしまうゲヘナ（地獄）の釜」という注がついている。ラザーも、70章15節（「それ（罪人に与えられる懲罰）はラザーであり、頭の皮まで剥ぎ取る」）に一回だけあらわれる語で、「激しい炎」が原義である。

サカルは初期の啓示に属する第74章に3回あらわれる。この箇所は、コーランにおける地獄の恐ろしさの描写の典型である。「やがてわれはサカルで彼（コーランが神の言葉であることを否定した者）を焼くであろう。サカルが何であるかを、何が汝に教えるか。それは何もかも免れさせず、また何もかも残さない。人の皮膚を、黒く焦がす。その上には19の天使がいる。われは業火の看守として、天使たちの他に誰も命じなかった」（74章26 - 31節）。サカルは、「荒れ狂う火、炎」を意味するシリア語「シェガラ」に由来する外来語であり、その当時のアラブ人にはなじみのない言葉であった。

サイールは、コーランには16回使われている。原義は、「点火され、燃え上がる火」である。

ジャハンナムは、地獄をあらわす言葉としてはコーランの中では最も使用頻度が高く、また現在でもイスラーム教徒の間で日常的に最もよく使われている言葉である。この語の起源は、旧約聖書にあらわれるヘブライ語「ゲー・ヒンノム」であり、これは、エルサレム近郊にある「ヒンノムの谷（ヒンノムは人名）」という地名である。かつてこの谷は、幼児を火で焼いて神に捧げるという儀式の場であった。幼児犠牲の儀式がおこなわれなくなってからも、この谷は動物や犯罪人の死体焼却場として使われ、火が消えることのない場所であった。「ゲー・ヒンノム」は、新約聖書では、「ゲエンナ」というギリシャ語となり、最後の審判の後、罪人たちが投げ込まれ、永遠に苦しむ火の池を指すようになった。そして、このゲエンナが、さらにエチオピア語のガハンナムを通じて、アラビア語に入り、ジャハンナムとなった。

最後にジャヒームは、コーランではジャハンナムに次いで、使用頻度の高い語である。この語の原義は「穴の中で激しく燃える火」であり、コーランでは、「地獄」の意味以外にも、原義どおりの普通名詞としても使われている。たとえば、偶像を破壊したアブラハムを、怒った人々が投げ込む「燃え盛る火（37章97節）もジャヒームと呼ばれている。一説によると、前述のエチオピア語ガハンナムが、アラビア語に借用されたときに短縮化されてジャヒームとなったのだという。そうだとすれば、ジャハンナムとジャヒームは、もともとは同一の語から派生した二つの異形ということになる。

地獄の動植物

ハーウィヤの語源からもわかるように、地獄は深淵である。その深さは、石が地獄の穴に投げ込まれたら、底に到達するまでに70年かかるほどである。広さはかなり広大であり、その中に山や谷がある。谷は、多くの深い淵を持ち、

そこには、蛇や蠍がいる。地獄の蛇はラクダの首ほどの太さがあり、蠍もラバの大きさを持つ。蛇や蠍に一度でも噛まれたら、その毒の効果は40年間続く。天国にトゥバーの木、シドラの木があったように、地獄にはザクームの木がある。「われはこの木（ザクームの木）を不義を行う者への懲罰として用意したのである。それは地獄の底に生える木で、その実は、悪魔の頭のようなものである。かれらは、その木の実を食べて、胃袋を満たし、それから上に沸騰する湯を注ぎ足される」（37章63 - 67節）。「まことにザクームの木こそは、罪あるものの食べ物である。それは溶けた銅のように胃袋の中で沸騰しよう。それは煮えたぎる熱湯のようなものである（44章43 - 46節）。ザクームの苦さはどれくらいかという、もしザクームの樹液の一滴でもこの世界の海に混入したならば、それは、世界の全住民を滅ぼしてしまうほどである。

地獄の食べ物と飲物

地獄の住人の食べ物としてコーランに明示されているのは、上に述べたザクームの木の実である。「彼らには苦い茨の外に、食物はなく、それは栄養にもならず、飢えも癒せない」（88章6 - 7節）という節にあらわれる「苦い茨」もザクームのことであろう。地獄の住民の飲物は、ガッサークとハミームの外にはないとコーラン（78章25節）で言われている。ガッサークとは、地獄の住民の体から流れ出す膿で、かれらはその膿に浸かり、それを飲まされる。この膿は恐ろしい悪臭を放ち、もし、バケツ一杯分の膿をこの世界に注いだとしたら、その汚臭のため、この世界のすべての人が死んでしまうであろう。「かれ（反逆者）は汚らしい水を飲まされる。かれはそれを飲み込もうとするが、なかなか飲み込めない。またまた死がすべての方向から迫るが、彼は死にもしない」というコーラン14章16 - 17節の中の「汚らしい水」とは

この膿のことである。ハミームとは、煮えたぎる湯のことで、ハミームを手にとるだけで、指は抜け落ち、顔に近づけると、目や頬が落ちてしまう。それが胃に到達すれば、内臓はばらばらに引き裂かれてしまう。

地獄の看守

ザバーニーヤとよばれる19人の天使が神から地獄の看守として任命されている。かれらは、両足も手と同じように使うことができる。一つの手で、1万人の不信者をつかむことができるので、両手両足をあわせて、一度に4万人の不信者をつかまえて業火の中に投げ込む。かれらの目は雷光のように鋭敏で、その歯は角のようである。その唇は足元まで垂れ下がり、口からは炎を発する。神はかれらの心の中に少しの慈悲も創造しなかったので、罪人がどんなに泣き叫んで赦しを乞いても、かれらは情け容赦なく火の中に投げ込む。かれらの長は、マーリクという名の天使である。彼は、地獄の火の最高管理者でもあるので、「火の天使」とも呼ばれる。マーリクは地獄の住民の数と同じだけの手足があり、それらの手足を使って、思うままに罪人たちを拷問する。マーリクを見れば、地獄の火でさえ恐ろしさのために震え上がる。

地獄の火

地獄の名称の多くが火あるいは炎という原義であることからわかるように、火こそはイスラームの地獄を象徴するものである。イスラームの地獄には、たとえば、仏教の地獄絵にみられるような手の込んだ様々な種類の拷問はない。イスラームの地獄における責め苦は徹底的に火で焼くというワンパターンである。しばしば、「火」(ナール)という普通名詞が定冠詞をともなって換喩的に地獄の意味で使われるのも不思議ではない。なぜ火が用いられるのかというと、多くの苦痛のなかで、火で焼かれるとい

う苦痛が最大の苦痛だからである。しかも地獄の火の激しさは、この世の火とは比べものにならない。一説では地獄の火の強さは、この世の火の70倍であるともいう。

次の話は地獄の火の凄まじい威力をよく伝えている。まだこの地上に火がなかったとき、神は、アダムが料理に使うことができるように、アダムのところに地獄から火を少しもっていったるように天使ガブリエルに命令した。火の天使マーリクが、ガブリエルにどれくらいほしいのかと尋ねたので「ナツメヤシの実の大きさ」と答えたところ、「その大きさを持っていけば、七つの天と大地が燃え尽きてしまうだろう」と答えた。「なつめやしの種の大きさ」というと、「その大きさを持っていけば、天から雨が一滴も降らなくなり、植物がみんな死んでしまうだろう」と答えた。途方にくれたガブリエルが神にどれくらい持っていったらいいのかと尋ねたところ、神は「原子の大きさ」と答えた。ガブリエルは原子の大きさの火を、さらに70回も川の水に浸したあと、アダムのところにもっていき、その火を山の上においた。すると、山がその熱で溶けてしまった。そして火は地獄に戻り、煙だけが石や鉄の中に残った。我々が現在まで、鉄や石を使って火をおこすことができるのは、この煙のおかげであるという。

また、地獄の火はこの世界の火と違って、光を与えることがない。地獄の炎は夜の闇のように漆黒である。

地獄における罪人の状態

地獄の住民たちの顔は熱湯に焼かれて炭のように黒くなる。目も見えず、口も利けない。背骨は折られ、耳と鼻は削ぎ取られる。彼らの手は枷で首に結び付けられ、顔が足元に重なる形で押さえつけられる。顔を下にして、火の上を引きずりまわされ、瞳には鉄の串が突き刺さる。髪は引き抜かれ、皮膚は焼けただれる。しかし、

焼けただれるたびに、新しい皮膚に取り替えられ、懲罰は繰り返される。かれらは死のみを願うが、地獄に死の救いはない。地獄で受ける懲罰は、その罪の軽重に応じて程度が違うはずだが、どうも中世のイスラームの説教師たちが描く地獄には、軽い懲罰というのではないようである。また、仏教の描く地獄のように罪の種類に応じて懲罰の方法が変わるといこともない。地獄の住民の中で最も軽い懲罰を受ける者でさえ、両足に火のサンダルを履かされ、その熱のため、脳髄まで煮えたぎる。彼の歯は、炭のように燃え、彼の内臓と足から炎が噴き出す。そのために、彼は自分が地獄の住民の中で最も厳しい罰を受けているのだと考える。実際は最も軽い罰を受けているのだけれども。

地獄からの救い

「罪を犯した者は地獄の懲罰の中に永遠に住む」とコーラン（43章74節）にあるように、地獄の懲罰は永遠に続くはずである。しかし、懲罰の恐ろしさの描写が時代を追うごとに増していくにつれ、神とムハンマドを信じるムスリムが永遠にこのような懲罰を受けることに疑問がでてきたのであろうか、すべてのムスリムは最後にはムハンマドのとりなしで地獄から救われるという考えがあらわれた。地獄の業火はかれらの魂を浄め、厳しい懲罰をこうむることによってかれらの罪は償われる。かれらは心から後悔し、ムハンマドに神へのとりなしを求める。

4000年後にかれらの救いを求める声がようやく天国のムハンマドに届く。彼は涙を流して、かれらを赦してくれるよう神に嘆願する。願いは聞き届けられ、「アッラーの他に神はなく、ムハンマドは神の預言者である」と唱えたことのあるすべての者は、地獄から救い出され天国に入る。「不信仰者たちは、自分たちがムスリムであったならばと願うことであろう」というコーランの一節（15章2節）は、この時に地獄に残された人々の気持ちであろう。このようにして最終的に地獄から救い出されるのは、地獄の中でも最上層であるジャハンナムの住民だけである。外面だけでイスラームを信仰し、心は不信仰者である「偽善者」は地獄の最下層であるハーウィヤに落とされていて救われることはない。ジャハンナムの火で魂が浄化されたあと天国に入るとい考えは、カトリックの煉獄の考えに似ている。煉獄も永遠ではなく、その住民は、火によって浄化されたあと、天国に入る。

煉獄の考えだけではなく、中世から近世のキリスト教の説教師による地獄の描写はイスラームの説教師の地獄と共通点が多い。地獄の恐ろしさを語るのはイスラームとキリスト教だけではない。日本にも地獄絵や六道絵などの伝統がある。人々を脅かし震え上がらせることによって、善に導こうとする説教師の情熱がこのようなおぞましい地獄のイメージを生み出したのであろう。